

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：43807

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720164

研究課題名(和文)ベケット文学における「歓待」

研究課題名(英文)Hospitality in Beckett's Works

研究代表者

垣口 由香(KAKIGUCHI, Yuka)

静岡県立大学短期大学部・一般教育等・講師

研究者番号：20550776

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ベケット文学における歓待の意義について考察を行った。そして、ベケット文学に書き込まれた歓待が西洋の司法政治的歓待の系譜を汲んでいることは明白ではあるが、ベケットは司法政治的歓待の失敗を描くことで、「条件つき歓待」と「無条件の歓待」の二律背反の中で、他者を無条件に受け入れる可能性に限界まで接近しようと試みていることを明らかにした。また、この試みは二つの世界大戦による反省に立つヨーロッパ的な試みであり、同時代の他の西洋の思想家らと共有されるものである。ベケットに加え、カズオ・イシグロの作品も歓待という観点から考察を行い、20世紀英文学における歓待研究を推進した。

研究成果の概要(英文)：This research is about the significance of hospitality in Samuel Beckett's works. I have made it clear there that although we can easily trace Beckett's hospitality back to Western tradition of hospitality, that is a political and juridical hospitality, he tries to break the tradition. By writing failure in hospitality, Beckett, oscillating between 'the conditional hospitality' and 'the unconditional hospitality,' closes the distance to the possibilities of welcoming others without any conditions to the limit. His efforts are typical of postwar Europe and shared by his contemporary European thinkers. Besides Beckett, I have dealt with the works of Kazuo Ishiguro, an English writer of Japanese ancestry, and advanced the research of hospitality in English literature.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英文学 サミュエル・ベケット 歓待

1. 研究開始当初の背景

「歓待 (hospitality)」は西洋文学・思想研究において古代ギリシャ時代から続く重要概念の一つであり、現在も国外強制退去や歓迎式典といった外交政治において生き続けていると同時に、病院 (hospital)、ホスピス (hospice)、旅館 (hotel)、ホステス (hostess) などといった、様々な派生語の中にその残響を響かせている。

特に近年においては、エマニュエル・レヴィナスやジャック・デリダ、ルネ・シェレールといった 20 世紀フランスの哲学者が、現代的コンテクストのもとで歓待論 (あるいは他者論) を展開している。これら哲学者の主題は、家も故郷も名前さえも持たない客 = 他者を主人の家へと迎え入れる可能性あるいはその条件であり、迎え入れることで主人と客それぞれが被る変容であり、多分に政治的かつ倫理的なものである。

しかしながら、英文学研究においてはこれまで、「歓待」に「主人が客を迎える」という人間主義に基づいた単純な意味しか与えて来ず、「歓待」に関する研究は英文学においては未開の領域と言える。そこで、自分自身、異国の地で客 = 異邦人として生きたサミュエル・ベケットの文学作品に書き込まれた歓待性を問うことで、英文学研究に一石を投じるねらいである。

2. 研究の目的

本研究は、サミュエル・ベケットという故国喪失者の文学作品を「歓待」という観点から検討するものである。その目的は、アイルランドからの客 = 異邦人としてフランスに生き、常に二国の言語・文化の軋轢の中で創作活動を行ったベケットの文学に書き込まれた歓待性を問うことで、ベケット文学における、客 = 他者を迎え入れることの可能性とその条件を解明することにある。この目的を達成するために、次の 3 つの小目的を設定する。

- (1) ベケット文学に書き込まれた「歓待」の検討
- (2) 作家サミュエル・ベケットにとっての「歓待」の検討
- (3) ベケット文学における歓待性と 20 世紀英文学における歓待性の比較検討

「歓待」の問題は、他者との対峙と常に向き合ってきた文学における普遍的課題であるとともに、外国人排斥やアイデンティティへの固執、国家ナショナリズムの台頭など、非歓待的な現代社会における火急の課題であると言える。

3. 研究の方法

ベケット文学に書き込まれた「歓待」の検討を第一の目的とする本研究は、「歓待」と

いう概念の正確な理解に基づくものである。「歓待」は古代ギリシャ時代から西洋にとって重要な概念であり続けているため、時代や国を問わず「歓待」に関する文献・資料を網羅的に収集・調査する必要がある。加えて、ベケットという作家個人にとっての「歓待」の意味も理解すべきであり、ベケットの草稿や書簡、自筆のノートなどの収集も行う。

本研究をより充実したものにするためには国内外の研究者との学術的対話や交流も欠かせない。「歓待」研究のネットワークの構築を行いながら、研究を進めていく。

研究成果は国内外における学会や研究会を通じて、あるいは論文等の形にまとめて公開し、広く社会に発信する。

具体的には、初年度は 2 に記した目的 (1) および (2) を遂行するために、「歓待」を扱った文献を網羅的に収集・精読し、「歓待」の概念に対する理解を深め、ベケット文学に書き込まれた「歓待」について研究する。また、作家の草稿やノート等を現地調査する。

二年次は初年度の研究を深めて主要な問題の検討にあたるとともに、翌年度に実施する (3) のために、「歓待」の問題を孕む 20 世紀英文学作品の収集を始める。

最終年度は 20 世紀英文学における「歓待」について広く研究を行い、これによりベケットの歓待性についてもさらに深めてゆく。

4. 研究成果

(1) 西洋における「歓待」概念

西洋の「歓待」という概念の歴史は古く、キリスト教以前の古代ギリシャ時代にまで遡る。しかし、この長い歴史故に、「歓待」の表す意味は非常に複雑かつ多様である。例えば、プラトンにとっての「歓待」は「市民に課される第一の義務」であったが、アリストテレスにとっては「賢人の徳」を意味し、キリスト教後は「万人への献身」へとその意味を変える。現代においては、「歓待」は現代的な文脈の中で再解釈され、新たな意味と重要性を与えられ始めている。その一例が、ムスタファ・デレクによる「多種多様な他者の中で生きるという世俗的現実を分析するための倫理的 政治的枠組み」としての歓待解釈である。

このような歓待概念の通時的意味の変遷を理解した上で、本研究において重要な論客は、ベケットと同じ時代を同じ場所で生きたフランスの哲学者レヴィナスであり、またレヴィナスの他者論を基に歓待論を著した、次世代のデリダやシェレールといった思想家たちである。

(2) 作家サミュエル・ベケットにとっての「歓待」

1928 年、ベケットは 22 歳でエコール・ノルマルの職を得て、ダブリンからパリへと移住する。その後はダブリンへ一時帰郷するも

の、ドイツやオーストリアへの長期旅行や、病気の治療のためのロンドン滞在を経て、1937年に再びパリを訪れた。そしてこの二度目の移住は、パリを「わが家」とみなしてのことであった。

作家としてのベケットのキャリアが本格化するの、二度目のパリ移住後のことであり、創作に先立って数々の歓待経験があったものと考えられる。様々な資料の分析から、ベケットにとって重要な歓待経験としてまず挙げられるのは1932年のパリでの外国人の国外退去命令であり、彼自身もこの非歓待法のあおりを受けた。第二に、言語的歓待経験が挙げられる。二度目のパリ移住後、ベケットは執筆における第一言語を母語の英語からフランス語に転換している。そして最後は、戦時中の逃亡生活である。ベケットは第二次世界大戦中にレジスタンス組織の一員として活動しており、それにより一時期は避難民＝客として他人の家に匿われることで生き延びた。

このように、ベケットにとって「歓待」の意義は決して小さくなく、ベケットという作家は異国の地で異国の言語で客として書いた作家であると言える。そして、三番目の歓待経験がとりわけベケットに大きな影響を与えたことを明らかにした。

(3) ベケット文学に書き込まれた「歓待」

ベケットの作品に描かれる「歓待」は、デリダの言葉を用いて簡単に述べると、「条件つき歓待」と「無条件の歓待」の二律背反である。彼の作品においては、これら二つの相矛盾する歓待が緊張を孕みつつも共存している。「条件つき歓待」とは、西洋の伝統に根ざした司法政治的歓待のことであり、客人が条件を満たした場合のみ歓待を受けることが可能となる。他方で「無条件の歓待」は、文字通り何の条件もなしに、万人に与えられる歓待である。ベケットは、デリダを始めとする他の思想家たちと同様に、「条件つき歓待」に抵抗し「無条件の歓待」を志向しながらも、その倒錯性、危険性、不可能性を熟知している。したがって、「条件つき歓待」の失敗を繰り返し描くことで、歓待の条件を無力化し、「無条件の歓待」が可能となる一歩手前で踏みとどまる。この緊張感が彼の作品を形作っていると言える。

主人が客を迎え入れ、「歓待」を与える前提となるのが「わが家=home」であるが、ベケットの作品においては作品そのものが「わが家」の役割を担っている。そしてこの「わが家」は内部に留まろうとする力と外部へ脱出しようとする力の拮抗により保たれる不安定な空間であり、「条件つき歓待」と「無条件の歓待」の二律背反と連動している。二律背反と同様に、ベケットにおける「歓待」の前提条件としての「わが家」は、破壊される寸前のところで保たれ、そこで行われる「条件つき歓待」を限りなく無化しながらも

維持するのである。

ベケットにとっての「歓待」は、上記以外に倫理や美学との関係から考察可能である。「歓待」の倫理性は司法や政治の枠組みを超越するものであり、ベケット自身のねらいと合致する。美学に関しては、20世紀の芸術作品に当時の倫理観の反映を見て取れることから、ベケットの作品に描かれる螺旋や球、円錐といった図形の解釈に、倫理と「歓待」を関連させる可能性を見ている。これらは今後の研究において、さらに発展させて行く予定の主題である。

具体的な研究成果として、大阪大学で行われた国際演劇学会でのSamuel Beckett Working Groupにおいて、『The Failed Hospitality in Beckett's Plays』という題目の研究発表を行うとともに、甲南女子大学における第38回日本サミュエル・ベケット研究会で行われたシンポジウム『異質なものの“arriver”する場—ベケットにおける死者、笑い、想像力』のパネルとして「ベケットと歓待」という題目で発表を行い、国内外に広く成果を発信した。また、共著として水声社より『サミュエル・ベケット！—これからの批評—』を出版し、かつ『言語文化研究』第12号に論文「『勝負の終わり』における内破する空間」を発表した。水声社から出版された共著『ベケットを見る八つの方法—批評のボーダレス—』では、ベケットと美学に関する論文の翻訳を行った。

(4) ベケット文学における歓待性と20世紀英文学における歓待性の比較検討

20世紀英文学において、J・M・クツェー（南アフリカ出身でアフリカーナーではあるが母語は英語。後年はオーストラリアに移住）とカズオ・イシグロ（日系イギリス人。幼少時にイギリスへ移住）という二人の作家が、ともに歓待的環境を生き、創作しているという点で、「歓待」という観点からは特に重要な作家であると言える。

本研究ではとりわけイシグロの作品を「歓待」および「インターナショナルリティ」という観点から分析した。ベケットから、およそ50年後に生まれたイシグロへと視線を移すと、他者の無条件の歓待へと限界まで接近しようと努める、二つの世界大戦によるヨーロッパ的反省に立つ「歓待」から、他者よりもむしろ自己に対する、閉鎖で内面的な「歓待」への変遷が認められた。これにより、さらに大きな文学的文脈において「歓待」を論じる意義を確認している。

具体的成果としては、『言語文化研究』第13号に論文「『インターナショナルな作家』としてのカズオ・イシグロの役割 『日の名残り』におけるスティーブンスの『職業的役割』から」を発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

垣口由香、「『インターナショナルな作家』としてのカズオ・イシグロの役割 『日の名残り』におけるスティーブンスの『職業的役割』から」、『言語文化研究』、査読有、第13号、静岡県立大学短期大学部静岡言語文化学会、2014年、pp.47-55
垣口由香、「『勝負の終わり』における内破する空間」、『言語文化研究』、査読有、第12号、静岡県立大学短期大学部静岡言語文化学会、2013年、pp.37-45

〔学会発表〕(計2件)

景英淑、垣口由香、井上喜幸、『異質なものの“arriver”する場—ベケットにおける死者、笑い、想像力』、第38回日本サミュエル・ベケット研究会、甲南女子大学、2011年12月10日
Yuka Kakiguchi, “The Failed Hospitalityin Beckett’s Plays,” International Federation for Theatre Research Annual Conference (国際演劇学会) 大阪大学、2011年8月7日

〔図書〕(計2件)

J・M・クッツェー、田尻芳樹、ステイブン・コナー、エヴリン・グロスマン、川島健、プリュノ・クレマン、西村和泉、アントニー・ウルマン、アンジェラ・ムアジャーニ(翻訳者: 垣口由香)、イノック・プレイヤー、森尚也、メアリー・プライデン、クリス・アッカー、対馬美千子、堀真理子、S・E・ゴントースキー、シェイン・ウェラー、井上喜幸、リンダ・ベン＝ツヴィ、近藤耕人、岡室美奈子、水声社、『ベケットを見る八つの方法—批評のボーダレス—』、2013年、pp.153-166
西村和泉、垣口由香、藤原曜、川島健、宮脇永吏、景英淑、菊池慶子、久米宗隆、片岡昇、木内久美子、岡室美奈子、水声社、『サミュエル・ベケット!—これからの批評—』、2012年、pp.53-74

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

垣口 由香 (KAKIGUCHI, Yuka)
静岡県立大学短期大学部・一般教育等・講師
研究者番号：20550776

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし